

ほんとのほんとのハッピーエンド

1

急に、夢から覚めたような感覚だった。

淀んだ、ぬるい空気が停滞していた肺の中に、きんと冷えた冬の空気が流れ込んでくる。まるで眠ってる間に季節が変わったみたい。

実際に——たぶん、季節は変わったんだと思う。

私の中に急によみがえった記憶の数々が、私に過ぎ去った日々の長さを教えてくれた。そうとは知らない間に、私は随分長く病院で過ごしていたらしい。

私は服を着ていなくて、ベッドの上で、パストルと二人でいる。

パストルは警戒心の強い猫みたいに、じっと私を見つめたまま動かない。

何か、言わなくちゃ。

でも、何を？

私はまだ、夢と現実の整理がついていない。

ただ、強烈に残っている記憶があった。

耳にへばりつく悲鳴。

血の臭い。

「——マルスさんは、ちゃんと家に帰してあげた？」

「ああ。能天気な顔で、ハーランのところに帰ったよ」

「そう……」

そっか。

マルスさん、ちゃんと家に帰れたんだ。

「ありがとう。約束守ってくれて」

鼻先でせせら笑って、パストルは私を置いてベッドをおりた。

クローゼットを開けて、カバンを取り出す。

それを、私に押し付けた。

「これは？」

「カバン」

「それはわかるけど」

「当面、生活できるだけの金が入ってる。それと、家の鍵と権利書」

「……どうのこと？」

「二人でどこかで暮らそうって、何度も誘っただろ？」

私は手の中のカバンを見下ろす。

家と、生活費。

パストルがそんなに具体的に準備を進めていたなんて、想像もしなかった。

それとも私は、想像する力を奪われていたんだろうか。

せっかく想像力を取り戻したことだし、パストルが私にこのカバンを渡した理由を想像してみることにする。

えーと、たぶん。

「……病院を出て、この家に行けってこと？」

「ほかに行く場所がないならな」

「そこで、パストルが来るのを待つ？」

「俺は行かない」

「……そうなの？」

私が首をかしげると、パストルは苛立ったように部屋のドアを開いた。

「さっきまで裸で抱き合ってたのに、急に私を追い出すの？」

「人聞きの悪い言い方をするなよ！ 逃がしてやるって言ってるんだ！」

「とりあえず、私も服着ようかな」

私は裸体にシーツを巻き付けて、ずるずると引きずりながらクローゼットを開いた。
下着と、ブラウスと、スカート。

いわゆる“いつもの服”を身に着けて、ようやく人間としてパストルと対等になる。
パストルは少し顔をしかめて、

「コートもいる。——病院の外は寒いから」

そう言って、私の隣に立った。

「私、コートなんて持ってない」

「わかってる。俺のを着ていけ」

「サイズが合わないよ」

「大きいくらい我慢できるだろ」

「小さすぎるかも。パストルすごく細いから」

「お前よりは細くない！」

いらいらと怒鳴って、パストルはコートを私に押し付けた。

「ほら、袖通して」

「ん」

「……あ、れ？」

袖は通った。

肩幅も、腕の長さもぶかぶかだ。

でも、胸のボタンは締まらない。

くすりと、私は嘔き出した。

「ほら、入らない」

当たり前だね。

パストルはすごく細いし、私みたいに胸もない。

パストルは、サイズの合わないコートを着てクスクス笑う私を見下ろして、少し冷えた頭で何かを考えているようだった。

「……用意させるよ、すぐに」

「今は夜中だよ？」

「〃オーリ〃を呼ぶ。あいつらのうちの誰かなら、オーリに合うサイズのコートを持ってるはずだから」

「コートなくなっちゃったら、〃オーリ〃さんが困らない？」

「新しいのを買ってやればいい」

「私には古着で、〃オーリ〃さんには新しいのプレゼントするんだ」

私が唇を尖らせると、パストルは困り果てたように私を見て、うつむき、静かに片手で両目を覆った。

「じゃあ……オーリはどうしたい？」

「それ、最初に聞いてほしかったなあ」

あはは、と私は笑う。

けど、パストルは笑いかえせずにいる。

「ごめん……でも……怖くて」

「私が？」

「オーリに……嫌いって……言われるのが……」

「言わないよ、そんなこと」

「どうして!?! だって俺、オーリにあんなこと……!」

「あんなこと？」

私が首をかしげると、パストルはひるんで少しだけ体を引いた。

「……俺の口から、説明させたい？」

「だってパストルは、〃私〃にはそんなにひどいことしてないなあって」

「……え？」

「マルスさんを捕まえて拷問したのは、すごく悪いことだけど、それは解決してくれたんでしょ？」

パストルは口元を引きつらせる。

私が何を言っているのか理解できてないみたい。

「記憶……ちゃんと戻ってないのか？ 俺がお前に何をしたのか、覚えてない？」

「ハーランのところから逃げ出した私を保護してくれて、嫌な記憶を忘れさせようとしてくれて、恋人同士になった？」

「違う……オーリが俺を恋人に選んだのは、俺がそうなるようにしたからで……逃げようとしただろう？ マルスと一緒に！」

「してないよ」

「な……に……？」

「急に知らない男の人が来て、〃待ち合わせの場所に来たら全部説明しますから〃って言われたから、待ち合わせの場所に行っただけ」

そして、そこにパストルが待っていたから驚いただけ。

後ろ暗くはあった。

だってパストルが私に秘密にしていることを、私はマルスさんから聞き出そうとしたんだから。

別に逃げるつもりじゃなかった。

でも、背後で急にドアが閉まったから驚いて、開けてほしくて私は騒いだ。

それだけ。

たったそれだけだ。

「そ……んなはず……だって、何度も……何度も逃げようとしたんだ……！ そのたびに俺が捕まえて、連れ戻して……」

「うーん……まあ、それも全部思い出したし、覚えてるんだけどさ」

記憶を操作されると気が付いて、病院から逃げ出そうとしたことなら、確かにある。パストルに「私の記憶をいじってるの？」と聞いたら、その記憶ごと消されたからだ。その事実には、私は自分の日記で気が付いた。だから、パストルに聞かずに、一度病院を出ようとした。で、それでも捕まって記憶を消された。

「パストルって、私に何も説明してくれないよね」

「……せ、つめい？」

「記憶を消してるの？ って聞いたときに、〃嫌な記憶があるから忘れさせてる〃って言うってくれば、それで私は納得したのに。その〃嫌な記憶〃だって、私は別に忘れなくてもよかったのに」

「だって、嫌な記憶なんて、ない方が……」

「私が『消して』って頼んだ記憶だけ消してくればよくない？」

「それは……でも……」

パストルはしどろもどろになって、私の質問にろくに答えられずにいる。

今まで患者さんにこういう質問されたことないのかな？

そうだよね。

パストルの患者さんはみんな、パストルに記憶を消してほしくて病院に来るんだし。

だからパストルは、他人にとっての「不要な記憶」が判断できると思ってる。

例えば、恋人とケンカした記憶。

不安に思った記憶。

恐怖を抱いた記憶。

パストルは、私を苦しめるような記憶を全部なかったことにして、私の頭にふわふわとした砂糖菓子みたいな記憶だけを残そうとした、

でも、パストルは全部覚えてる。

覚えてるから、全部忘れてふわふわしている私を見て不安になる。

何もかも忘れてる私の抱く感情が、全部嘘に思えて辛くなる。

「パストルは、私と話すの……いや？」

パストルは苦しそうに眉を寄せ、静かに、首を左右に振る。

「じゃあ、話そうよ。ケンカもしよう。それで、仲直りしよう」

「無理だよ……そんなの……」

はらはらと、パストルの赤い目から透明な涙がこぼれ落ちる。

「だって……俺なんか、と……仲直りしても……オーリにはなんの得もない。ケンカしたら終わりだ。オーリは俺の事嫌いになる……！ 嫌いになって、俺を捨てて、ほかのやつのもとに行くんだ……！」

「今まさに、私は一生懸命パストルと話そうとしてるんだけどなあ」

私はパストルの涙をぬぐってあげる。

よしよしと髪を撫でると、パストルは私の肩にそっと額を押し付けた。

「どうして私が、こんなにかわいいパストルを捨てると思うの？」

「だって俺は……ヴィスクみたいにちゃんとした大人じゃないし……」

「うん」

「ハーランみたいに、女の喜ばせ方も分らない……」

「„オーリ“さんたちとは仲良くできてたんでしょ？」

「あいつらは部下だ！俺に気に入られる以外に生きてく方法がないから、仕方なく俺に合わせて歪んでるだけなんだよ……！だから……」

「私に自由に考えさせたら、愛想をつかしてどこかに行っちゃう？」

パストルはうなづく。

肩に、パストルの涙がしみ込んで熱かった。

まるで子供の体温みたい。

「ねえ……私がパストルに、恋人になってあげるって言ったときは、一度も„やりなおし“してなかったよね？」

パストルはうなづく。

あの頃、パストルはまだ私を自分から遠ざけようとしていた。

今なら理由がわかる。

近づけてしまったら、手に入れてしまったら、パストルは自分が„こう“せずにはいられないって理解していたんだろう。

でも、私は踏み込んだ。

この不安定で、壊れてしまいそうなパストルを受け入れて、愛することを選んだ。

その選択は嘘じゃない。

それが嘘じゃないことを、私はちゃんと覚えている。

覚えているから、確信できる。

「あれは私の意思だよ、パストル。私が考えて、自分で決めたの。口が悪くて、我儘で、つつきんどんで、女の人を何人も困らせて、癪癪起こして大暴れするパストルの恋人になるって、私が自分で決めたの」

「バカだな、オーリ……それは愛じゃない。憐れみだ。ただの病気の発作だよ」
「それって、いけないこと？」

パストルは顔を上げた。

きよとした赤い目は、まるで二十五年前みたいだ。

「憐れみで恋人になっちゃダメ？ もし、私がパストルを支えてあげたいって思うこの気持ちで病気で、それが治らないなら、私はパストルのそばから離れないってことに証明になるんじゃない？」

「……わからない」

パストルは首を左右に振った。

「俺より哀れなやつが出てきたら、そっちに行くかも……」

「その時は、今みたいに泣いて、縫って、自分がどんなに可哀想か私に教えて」

「なんだよ、それ……そんなこと……」

「可哀想な子でいて、パストル。人を信じられなくて、遠ざけて、拒絶して、怒って、泣いて、迷惑かけて——私だけが心の支えだって顔をしててよ。そうしたら、私は不安じゃないから。〃パストルは私がいないとダメなんだから〃なんて思って、ぐずぐずの共依存に浸ってられる」

「……じゃあ、俺がちゃんとした大人になったら？ 安定して、人を信じて、受け入れて、いつも笑顔で、他人に手を差し伸べるような男になったら？」

「そんなに素敵な人に死ぬほど愛されたら、普通に好きになっちゃうんじゃない？」

私は笑うと、パストルも弱々しく嘔き出した。

笑いながら涙をぬぐって、未だに私の体にひっかかっている、サイズの合わないコートに指を這わせる。

「……コート、一緒に買いに行こう。二人で散歩に行けるように」

「うん」

「手袋も、マフラーも……オーリが好きなカフェのテラスで、熱いお茶を飲んだりして」

「うん、素敵」

「仕事が欲しかったら、なんでも勉強したらいい。医学でも、薬学でも、看護学でも」

「そんなことしたら、私、パストルの病院からいなくなっちゃうかもよ？」

「いいよ。そしたら死ぬから」

ぎくりとして、私はパストルを見た。

泣き笑いの後のパストルの表情は、すごく穏やかで、すごく優しくて――。
何かを決めたように、ひどく強い。

「本当は、今日、オーリをここから送り出して、そのまま死ぬ気だったんだ。でも、オーリがチャンスを与えるなら……もう一度、やり直すよ。今度は何も誤魔化さないで」

「パストル……」

「オーリが一人で生きられるようになって、ほかにどんなにいい男が現れても、どんなに哀れな男が現れても……俺のそばにすることを選んでもらえるように、どんな努力だってする。そうしたら――」

「そうしたら……？」

「俺と結婚して。俺の家族になって」

家族。

その言葉が、パストルは嫌いだ。

両親に疎まれ、弟が生まれた数年後、馬車から突き落とされて捨てられたパストルにとって、家族は嫌悪と疑いの対象でしかない。

でもきつと、ずっと懂れてもいたんだろう。

あたたかくて、安らげるような家族の存在に。

私の頬を撫でるパストルの手は震えている。

私がここで断つても、パストルはこれを「なかったこと」にはしないだろう。

これは、パストルが勇気を振り絞って私に差し出した、剥き出しの心臓だ。

「――うん。結婚しよう。家族になろう。私は今でもいいけど」

「それはまだダメ。俺はまだ、オーリに全然ふさわしくないから」

「先は長そうだなあ」

「そう長くないよ。――少なくとも、二十五年は待たせない」

私がわざとらしく呆れたように言うと、パストルは、私が眠り続けていた時間を引き合いに出してまぜっかえした。

毎日が、穏やかに過ぎていく。

私はパストルと連れ立って、よく出かけるようになった。

私と一緒にいるときだけ、パストルは拒食症から解放される。

二人でいろんなものを食べた。

折れそうだった体に筋肉と脂肪がついて、服のサイズを三つ上げると、パストルのコートは私の体をすっかり包めるようになる。

「なんか、自分の体がふにふにしてる感じがして落ち着かないな……」

「そのくらい筋肉と脂肪がついててくれないと、抱き合うたびに骨がゴツゴツ当たって痛いんだよ、パストル……」

「え？ 痛かった？」

「腕枕とか、寝心地最悪だったんだよ、実は」

「そっか……そうだよな……」

パストルは自分の腕を見る。

成人男性としては、まだまだ圧倒的にやせ型だ。

そんな男が、自分の腕の脂肪を軽くつついたあと、あろうことか、私の二の腕の脂肪をつまむ。

「ちょっと、パストル……!!」

「ん？」

「恥ずかしいでしょ！ パストルと同じメニュー食べてるから、私もちよっと太っちゃったんだから……!」

「いや、確かに柔らかい方が気持ちいいなって」

私が頬を膨らませると、パストルは「オーリはそんな顔しない」と言っ、私の頬をぎゅっと押しつぶす。

そんな、くだらない、愛おしいようなじゃれ合いを、私たちは飽きることなく繰り返した。

毎晩のように私を求めて、縋るように犯した日々が嘘みたい、パストルは私に触れなくなった。

それとなく私から誘ってみたこともあるけれど、パストルはいまいに笑って、ただキスだけを返す。

パストルの「オーリ」たちは全員別の病院に就職が決まって、病院のみなさんでお祝いとお別れ会をした。

パストルの最後の「オーリ」達は私を次々と抱きしめて、だれもが目に涙をためて、「ありがとう」と口々に言った。

一つ一つ、複雑に絡まったパストルの心の糸がほどけていく。

私が全部の記憶を取り戻して、パストルが「変わる」と決めて、まだほんの数ヶ月しかたっていないのに、パストルは目に見えて安定し始めていた。

馬車から突き落とされて、途方に暮れて、泣き方も分からずにいた男の子。

絶対に笑わない、図書室の幽霊。

私の膝に乗って、ほほ笑んでいた男の子。

私の手を引いて、声を上げて笑う、きれいな、大人の、男の人。

「ねえ、パストル」

「うん？」

「無理してない？」

お別れ会のあと、私とパストルは、病院の敷地にある遊歩道をぶらぶらと並んで歩いていた。

この数ヶ月で冬は終わりつつあるけど、夜にはまだコートが必要だ。

「……無理してるように見えるか？」

「そうじゃないけど」

「急に変わったから不気味？」

「不気味というか、心配」

「でも、病気が治るときって、そんなものだから」

「……病気」

急に、すんと腑に落ちた。

確かに、パストルは病んでいた。

私のそばにいたために、私の記憶を都合よく操作しようとするのは、まともな考え方じゃない。

そうしないと私が離れていくという思い込みだって、パストルの心の病気の象徴だ。

「パストルの病気、治ったの？」

「いや？　でも薬があるから」

「それって、まさか私の事だったりする？」

「強い薬だから、用法容量を間違えると劇薬になる」

くすくすと笑って、パストルは私の頬にキスをする。

くすぐったい。

くすぐたくて、むずむずする。

困ったな。

うーん、困った。

「オーリ？」

「……私の方が病気になっちゃったかも」

「え？　具合悪い？」

「じゃなくて……なんか……こう……」

触ってほしいって、どうやって言えばいいのかな。

頬や、おでこのキスじゃなくて、触れ合うだけのキスじゃなくて、もっと私の体の深いところに触れてほしいって。

私がおもだしていると、パストルは何も知らない子供みたいな純朴な表情で私を見る。

この顔で見られると、なんだか私の欲望が汚らしいような気がしてきて、ますます何も言えなくなる。

私はため息をついた。

「……なんでもない」

「なんでもないことないだろ？　何かあるなら言ってくれ」

「なんでもないってば」

あ、今の言い方ちょっと感じ悪かったな。
傷つけたかも。

慌ててパストルの目を見ると、その目は穏やかに私を見下ろしている。
穏やかというか……にやにやしている。

「……わかってるでしょ」

「え？ なに？」

「全部わかってるのに、私に言わせようとしてる！」

私が肩を叩くと、パストルは楽しそうに笑い声をあげて、不意に私を抱きしめた。
びっくりするくらい強く。

「パ、パストル？」

「——こういうのがいい？」

「こ、こういうのっていうか……」

「それとも、こういうの？」

パストルの唇が、私の耳に触れる。

急に至近距離でささやかれた声に、鼓膜が震えて、私は「ひゃ」と情けない声を上げた。

「パストル……!!」

「怒らないで。ごめん。でも嬉しくて」

「何が……」

「俺のこと、欲しいって思った？」

「……別に思っていないけど」

パストルの腕の中で、私はわざと嘘をついた。

私を抱きしめる腕の力は、それでも少しも緩まない。

「嘘だよ、それは」

「本当ですー」

「嘘だ。——わかるよ、ちゃんと。もう、ちゃんとわかる」

急に、泣きそうになった。

この数ヶ月、パストルは「私」を見てたんだ。

パストルがどうしたいかじゃなくて、私がどうしたいのかを、ちゃんと見てくれていた。

自分が安定した姿を私に見せて、私を安心させて、私が逃げられるチャンスをいくつも作って、私が自分の意思を思い出せるまで待っていてくれたんだ。

「オーリは、俺が欲しい？ 欲しいって、思ってくれる？」

「うん……欲しい。ずっと私のでいてほしい」

「ヴィスクよりも、ハーランよりも？」

ヴィスクも、ハーランも、孤児院で一緒に過ごした私の大事な子供たちだ。

私に花を送ってくれた十四歳の男の子。

いつも私を追いかけて泣いていた十歳の男の子。

二人ともパストルと同じように、今は私よりずっと年上になってしまった。

ふたりは、私がいなくてもきつとどうにか生きていける。

ヴィスクは強い人だし、ハーランには誰からも愛される才能がある。

本当に？

私がそう思いたいだけかも。

それでも、今、私の前にはパストルがいる。

誰に、どんなふうに求められたとしても、この人を置き去りにして、誰かのところに走っていくなんて、私にはできない。

「町を出ようか、パストル」

「……え？」

「ヴィスクも、ハーランも、ほかの誰もいないところに行こう。パストルが不安にならないように」

「……俺が、そうしたいなら？」

「ううん。私がそうしたい。パストルが一番大事だから」

唇を重ねるのに、お互いに躊躇はなかった。

触れるようなキスは、次第に体温を求めるように深くなる。

私とパストルの唇の間で、二人の吐く息が白く濁った。

「部屋に戻ろう、オーリ」

「うん」

「実は、もう準備できてるんだ。職員の間にも話してある。どうしても俺じやなきやダメな患者だけ連れて来いって」

「私がこういうってわかってたの？」

「わからなかったよ。——でも、言っただけだった」

祈るように、パストルは私の手に口づけた。

そのまま私の手をひっぱって、二人で過ぎた塔の最上階に駆け込む。

「私、この部屋好きだったよ。おとぎ話みたいで」

「魔術師が住んでそうだろ？」

「そう、眠り姫の」

「そのイメージで建てたから」

パストルは私の体を抱き上げて、柔らかなベッドに押し沈めた。

私のブラウスのボタンを外す手は、もう、不安や恐怖に震えていない。

優しくて、穏やかで、プレゼントを開ける子供みたいな期待に満ちている。

私はそんなパストルの上着をはぎ取って、シャツをぐいぐい押し上げた。

パストルの胸に指を這わせても、もう、ゴツゴツとした肋骨は指先に触れない。

いつもパストルを包んでいた死の気配を、筋肉と脂肪が覆っている。

それが嬉しくて、私はパストルの胸に唇を落とした。

何度も、何度も。

「くすぐったいよ、オーリ」

「パストルだって、私にしてたじゃない」

「それは……だって、俺は男だし……」

「いいから。お姉ちゃんの言う事きいて」

私は体を起こして、パストルをベッドに押し倒す。

不安そうなパストルの服をすべてすっかり脱がし終えて、私はその、彫刻みたいに白い肌に指を這わせた。

綺麗なパストル。

こんなに綺麗なのに、パストルは自分が醜いと思ってる。

だから、

「……あんまり、みないで……」

と、消え入りそうな声で言った。

私はそんなパストルの唇に、濡れた舌を滑り込ませる。

キスに応じるパストルの舌が、私の口腔をはい回るたびに、私はもつとパストルに触れたくてどうしようもなくなってくる。

それはパストルも同じみたいで、私と舌を絡めながら、その手は自然に私の腰を撫でて、お尻を包み込むように揉みしだいた。

「あ、こら……」

「キス、やめないで。お願い」

叱ろうとすると、パストルがキスの続きをねだる。

仕方なく応じるけど、パストルの手つきに意識が引つ張られて、キスに集中できなくなる。悪戯な指先が、つ、と私の脚の間に滑り込んで、私は声を上げてのけぞった。

触れられることを待ち望んでいたみたいに、全身がかつと熱くなる。

私はパストルの腰に座り込んでしまった。

そうすると、パストルはゆるりと体を起こして、私の体をさらに密着させるみたいに抱き寄せる。

にちやにちやと、敏感な部分の触れ合う音が、私たちの吐息に混じった。

「もう濡れてる……すごい、ぬるぬる……」

「うん……早く欲しい……中に……」

「まだダメ。もうちょつと、このまま……」

ぬるぬる、にちやにちや。

パストルの硬くなったものが、私の入り口をねっとりとなねぶる。

あ、と切なく囁く声が、私の口からも、パストルの口からも絶え間なくこぼれて、お互いの耳元に唇を寄せて「好き」と「愛してる」を繰り返した。

ふわふわとした、非現実的な幸福感に、私たちは酔っていた。

涙が自然に流れて、前に私がそうしたように、パストルが唇で涙をぬぐってくれる。そしてようやく、ゆるゆると、パストルが私の中に入ってきた。

体の一番深いところから、パストルはしばらく動かずにいる。

呼吸と、鼓動。

吐息、体温。私の世界が、それでいっぱいになる。

「愛してるよ、パストル。愛してる」

「俺も……俺も愛してる」

今までで一番深いキスをしながら、パストルは腰をゆすりあげた。

激しくかき乱すような動きじゃなくて、いたわるような、味わうような、ゆつくりとしたその動きで、私は何も考えられなくなる。

気持ちいい。

ずっとこうしててほしい。

体は何度もイってるのに、また続きが欲しくなって、ぐちゃぐちゃになってしまう。

「ああ、も……いきそ……中に、いい？ オーリの中に……」

「いいよ……出して……中に全部……っあ……ああ……!!」

今更だ。

全部今更。

でも、その今更が、全部愛おしい。

パストルが私を抱きしめて、快樂にもがく私の中に、どろりとした熱が注がれる。脳みそをかき回していた極彩色の波がすうと引いて、私は深く、深く息を吐いた。

このまま、ずっと夜ならいいのに。

「——それはだめだよ。これから二人で暮らすのに」

「私の頭の中、読んだ？」

「声に出てた」

私の中にとどまったまま、ぎゅーっと、パストルが私を抱きしめる。

「二人で暮らして、本当のハッピーエンドを作ろう。目を覚ましたお姫様と、心を入れ替えた魔術師の二人のさ」

「お姫様が幸せて、魔術師も悲しくないハッピーエンドね」

とろりとした、幸福な眠気が私を包む。

私がうとうとと目を閉じると、パストルがわたしの瞼に唇を押し付けた。

「眠っていいよ。大丈夫、目を覚ましてもなんにも忘れてないから」

「微妙に不安になること言わないでよ……！」

私はぐいとパストルの体を押し返す。

だけでもう一度引き寄せて、その唇にキスをした。

「おやすみ。私の可愛い魔術師さん」